

2022.12.11.Sun.
ゴシック・アンド・ロリータ
クローズド・コンサート 完全招待制
メインビジュアル：NABEchan
協賛：三尾徹、福羽泰紀、林健太郎、吉田貴文
主催：mumyo LLC

mumyo

演奏
成田達輝

作曲
梅本佑利
山根明季子

[作品]

1. 黒いリボンをつけたブーレ
2. Embellish Me!
3. Melt Me!
4. リボン集積

5. コピー・アンド・ペースト, 大量生産/消費された不規則/不完全な形状のプラスチック真珠そして私。
6. リボンの血肉と蒸気
7. 廃墟・秋葉原のアリス 1, 2
8. パニエ、美学

梅本佑利 (Yuri Umemoto, 2002-) 作曲「Embellish Me!」「Melt Me!」「コピー・アンド・ペースト, 大量生産/消費された不規則/不完全な形状のプラスチック真珠そして私。」「廃墟・秋葉原のアリス 1, 2」

山根明季子 (Akiko Yamane, 1982-) 作曲「黒いリボンをつけたブーレ」「リボン集積」「リボンの血肉と蒸気」「パニエ、美学」

黒いリボンをつけたブーレ

Bourrée with black ribbons (2022) 4min.

J.S.バッハ「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ第1番」よりTempo di Bourréeを下地に、ゴシックとロリータについての考察を始めた。ゴシック・アンド・ロリータ（ゴスロリ）は、ヨーロッパの伝統を下地に日本のストリートで再構築された服飾文化、サブカルチャーであり、現代では日常から遠ざけられているタナトスを想起させるゴシックと、少女的典型であるロリータが独自に結び付いた表現である。「黒いリボンをつけたブーレ」では、ヨーロッパ伝統音楽を体現している楽器でもあるヴァイオリン独奏曲として、当時のクラシック音楽における厳格なルールを部分的に採用或いは外し、デフォルメを施してポップに切り分け、同時代日本のストリートと"崇高"なる西洋の「影」を重ね反復装飾した。

エンブリッシュ・ミー！

Embellish Me! (2022) 2min.

メルト・ミー！

Melt Me! (2022) 2min.

「エンブリッシュ・ミー!」、「メルト・ミー!」、「コピー・アンド・ペースト, 大量生産/消費された不規則/不完全な形状のプラスチック真珠そして私。」(後述)の3作は、日本のゴシック・アンド・ロリータ文化の考察、その服飾、精神的な「装飾」と西洋音楽における「装飾音」の再考、両文化における「少女」の在り方をコンセプトに作曲され、それぞれ、J.S.バッハの動機が引用されている。ここでのバロック音楽・バッハによる構造物は廃墟的に扱われ、ゴシックの文脈と共鳴する。

これらの作品は、ルイス・キャロルによる児童小説「不思議の国のアリス」のモチーフや世界観が根底にある。ここで描かれる「アリス」は、「ゴスロリ」文化にとって象徴的なキャラクターであり、西洋音楽における「少女」の現在地を、西洋文化と、日本的サブカルチャーの両目の視点で更新する存在である。

それぞれの題名にある"~Me"の語感、同名の小説に登場する、"Drink Me"（私を飲んで）や、"Eat Me"（私を食べて）と書かれた小瓶やケーキに由来する。アリスはこれらを飲んだり食べたりすることで、体を自在に変化させ、不思議な世界を知恵で生き延びる。

3曲は、そんなアリスのメタモルフォーゼを「ゴスロリ」的な装飾として表す。「エンブリッシュ・ミー！」（私を装飾して！）での、古典/従来の装飾音符は、装飾される音の原型を留めないほど過剰に扱われる。また、ここでは、モチーフにかけられる微分音的な音高の変化、伸び縮みを「装飾音」とする。この装飾の概念は、DAW上でオーディオのピッチを変調する行為に近い。アリスは現代の少女として、自撮りのフィルターで顔や体を装飾し、自在に変身する。

「メルト・ミー！」（私を溶かして！）では、「エンブリッシュ・ミー！」にみられた微分音的「装飾」で、溶けるケーキ=パッハを描く。ケーキが溶けるというイメージは、本プロジェクトのために描かれたNABEchanのビジュアルから着想を得た。

リボン集積

Ribbon Accumulation (2022) 4min.

ヨーロッパ伝統の機能と和声を下地とし、その主従と秩序、規律、逸脱を紡いだ音楽。リボンという少女的アイコンを、肌感覚を通して音という目に見えないものに抽象化し延々と描くことで作られている。リボンは西洋の音の伝統と重ねられ、その崇高さの奥底・内側にある暴力や残酷性、グロテスクといった様々なものを反芻していく。

コピー・アンド・ペースト、大量生産/消費された不規則/不完全な形状のプラスチック真珠そして私。

Copy and paste, mass produced/consumed irregular/imperfectly shaped plastic pearls and Me.
(2022) 6min.

過去の文化が歪んだ形（廃墟）となって目の前に現れる様子は、（これまでの梅本）3作に共通する。「コピー・アンド・ペースト、大量生産/消費された不規則/不完全な形状のプラスチック真珠そして私。」では、コンピュータ上で行われたこれらの作曲における、いわゆる「コピー」の多用を表題とし、無限に生産、消費され続けるチープなプラスチック製の「歪んだ真珠」=「バロック」を描く。

リボンの血肉と蒸気

Ribbon flesh and blood and vapor (2022) 3min.

全体がJ.S.パッハ「無伴奏ソナタ第2番アレグロ」の切り貼り加工によってのみ作られている。近代以降ネット社会に至るまで資本主義が加速する時代の肉体の記憶をテーマに、西洋音楽の根幹・キリスト教における聖処女マリアとそのゴシックメタファーをイメージしてコラージュを進めた。

廃墟・秋葉原のアリス 1, 2

Alice in Abandoned Akihabara 1, 2 (2022) 9.5min.

「廃墟・秋葉原のアリス」は、近未来、廃墟となった秋葉原のメイドカフェの世界線である。破壊と再生の街、

秋葉原。時を遡ること150年前、大火を受けてできた火除地に「秋葉原」は生まれた。その後、第二次世界大戦で再び焼け野原となった秋葉原の闇市から電気街が生まれ、高度経済成長とともに発展。しかしその後、バブル崩壊で家電市場は奪われ、オタクの街となった。同時期にゴスの文脈から派生したメイド服のロリータは、秋葉原の住人「オタク」に吸収された。そしてオタクの街は外国人に発見され、観光地となった。今、秋葉原は未曾有のパンデミックによって廃墟化が進んでいる。その先の近未来、もしくは、核戦争、経済破綻、巨大地震、隕石の衝突、宇宙人の襲来...で、東京・秋葉原が風化、破壊されたディストピアな世界線。

これは「オタク」と「ゴス」を横断するロリータ、アリスの物語。吸収するオタクとゴスの逆転劇。未来を見つめるSF的な「オタク」視点と、「ゴス」の、過去を見つめる廃墟への眼差し、西洋と日本文化、複雑化したシミュレーションのねじれがここにある。

パニエ、美学

Pannier clothing, Aesthetic (2022) 4min.

西洋音楽対位法の完成形、フーガ。その荘厳なるフーガを成立させている構造を放棄して、ばらばらに分解して繰り返し、永遠性への志向のもとマシーナリーに円環させる。タイトルのパニエは、ドレスやスカートを膨らませるためのルイ王朝時代に起源を持つ下着であり、日本ではロリータ・ファッションとして独自の形に用いられている。現代日本のストリートでも着用して歩ける丈の短いドレス・西洋装を、切断した音楽形式フーガに重ねる。

全引用楽曲 J.S.Bachより

Partita No. 1 in B minor, BWV 1002 "Tempo di Bourrée"
Partita No.2 in D minor, BWV 1004 "Sarabande"
Sonata No.1 in G minor, BWV 1001 "Presto"
Partita No.3 in E major, BWV 1006 "Gavotte en Rondeau"
Sonata No. 2 in A minor, BWV 1003 "Allegro"
Sonata No.3 in C major, BWV 1005 "Fuga"

成田達輝（Tatsuki Narita）ヴァイオリニスト。2022年9月、坂本龍一作曲のヴァイオリンソナタと弦楽四重奏曲を作曲家監修の元で録音。10月には故・一柳慧作曲の遺作「ヴァイオリンと三味線のための二重協奏曲」を読売日本交響楽団とサントリーホールで世界初演。11月、梅本佑利、山根明季子と共にmumyoを結成。本日が結成後初の公演となる。1992年生まれ。札幌で3歳よりヴァイオリンを始める。ロン=ティボー国際コンクール(2010)エリザベート王妃国際音楽コンクール(2012)、仙台国際音楽コンクール(2013)でそれぞれ第2位受賞。使用楽器は、アントニオ・ストラディヴァリ黄金期の「Tartini」1711年製。(宗次コレクションより貸与)。